YOC2010 報告書

【日時】2010 年（平成 22 年）8 月 13 日（金）～15 日（日）
【場所】上尾市プラザ 22、上尾運動公園体育館　他
【報告者】鬼塚　誠太郎

第１　はじめに

私が YOC の存在を知ったのは、10 年前のことである。中学校 3 年生の夏に、全国の若手審判員を集めて合宿を開催するという記事を、当時バスケットプレーヤーのバイブルであった月刊バスケで読んだ時のことだった。同時に審判に関する記事も書かれており、当時の審判部長のインタビューが載っていた記憶がある。

それから 10 年。今回が 10 回目の YOC となり、京都から多くの諸先輩方が YOC 卒業生として私たちに指導していただいてきた。25 歳という参加条件としてはラストイヤーで上尾行きのお話をいただいたことに、感謝してもしきれないほどである。

YOC に参加した受講生は、多くの「お土産」を持って帰ったはずである。

総じて言えば、第一に、日本のトップレベルを感じたということ。第二に、自分の現在地を確認したこと。第三に、危機感を持ったということである。

それらの「お土産」を、今後の審判活動に活かしていきたいと思う。

第２　講師（順不同）

関口知之氏　吉田正治氏　岩田千奈美氏　片寄達氏　吉田利治氏　倉田勉氏
平原勇次氏　吉田憲生氏　山崎人志氏　岩木太郎氏　蒲健一氏　安西郷史氏
小澤勤氏　須黒祥子氏

第３　スケジュール概略

8 月 13 日（金）

13：00　開講式

13：15　**〈講義Ⅰ〉「アスリートと食事について」**
講師：河谷彰子氏（株式会社レオックジャパン/横浜 FC 栄養管理士）

14：15　**〈映画〉「REFEREE」**
提供：UPLINK CO.

16：00　**〈講義Ⅱ〉「英会話の重要性」**
講師：梶川三枝氏（SPRTS FOR SMILE）

17：05　移動

19：00　**〈講義Ⅲ〉「ファンダメンタル・良い審判員になるためには」**
講師：Mr. Costas Rigas（FIBA）

20：30　班別ミーティング

8 月 14 日（土）

9：30　**〈実技Ⅰ〉**

男女高校生のモデルゲームを用い実技講習を行う。

18：40　**〈講義Ⅳ〉「ルールについて」**

講師：平野彰夫氏（規則委員長）

19：00　**〈講義Ⅴ〉「全日本ナショナリズムの諸活動に参加して」**

講師：貝塚宗義氏（元全日本ナショナルチーム　マネージャー）

19：20　**〈講義Ⅵ〉「世界のトップレベルで求められているレフェリングとは」**

講師：Mr. Costas Rigas（FIBA）

8 月 15 日（日）

9：00　　閉校式

9：30　　**〈実技Ⅱ〉**

各自解散

第４　講義内容および所感

〈講義Ⅰ〉「アスリートと食事について」

講師：河谷彰子氏（株式会社レオックジャパン/横浜 FC 栄養管理士）

横浜 FC の栄養管理士をつとめておられる河谷氏から、アスリートと食事の関係について、強い身体をつくるには食生活が基本にある、という講義をしていただく。

講習生が大学生から社会人までと一人暮らしが多く、偏った食生活を送りがちな若年層にとって意義のある時間となった。

【講義メモ】

（１）バランスのよい食事とは何か？自身で留意していることは何か？

・食事とはコミュニケーションツールである。

・バランスの良い食事を心がけなければならないが、しばしば私たちの知識には誤解や誤った情報があるので、注意しなければならない。

…たとえば、オレンジジュース１００％とコーラでは同じ糖分が入っている。

・試合前の食事について

…炭水化物を多く摂取。他の食事とカロリーは同じ。

・サプリメント、栄養ドリンクに頼る必要はない。

…それ以上に食生活をただすことにエネルギーを注ぐこと。

（２）プロアスリートのタイムマネージメント

・生活のリズムを正すことが基本。

①6 時間は睡眠をとる。

②寝る 3～4 時間前の食事には油モノは禁物。

③夕食が遅くなるときは、炭水化物だけ早目の時間帯に摂取するなど、2 回に分ける。

（３）プロ意識を持つこと

・自分に合った食生活を見つけ出す。

・ON,OFF のメリハリ。
・ゆるいルールを作って自分で守る。
・コミュニケーションのツールにする。
・ゲームにピークを合わせる。
・お酒は飲む日を間違えない。（試合前日には飲む量を控える）

〈映画〉「REFEREE」
提供：UPLINK CO.

サッカーの国際審判員がどのように試合に臨み、試合を感じ、試合を運営しているかを感じた映画であった。国際ゲームの判定問題は、しばしば国交問題にも発展する。

映像技術が発達し、オフサイド（バスケットボールでいえばバイオレーション）の判定では、TV を見ているほうがよく分かることもしばしばある。

しかし、それでも数々の競技において審判員は人間であることが多いのは、（リガス氏の講義メモに後述）「正しいかどうかではなく、そのゲームにとって正しかったかどうか」を感じて判定することができるからではないか。

〈講義Ⅱ〉「英会話の重要性」
講師：梶川三枝氏（SPRTS FOR SMILE）

国際試合での英会話のレベルは年々上がってきており、講師陣もリガス氏と流暢な英語で会話をしていた。英語を学ぶ機会は社会人になると激減し、体力と同じように、意識しながらトレーニングを積まなければならないもののひとつである。

講師の梶川氏は旅行会社に勤務しながら、毎週水曜日の定休日に夜行バスで名古屋から東京へ移動して英会話のレッスンを受けるという生活を送って、海外留学を果たしたとのことだった。

氏は「強い思いを持てば、必ず実現する」ことを強調。そのための努力は惜しんではいけないとも話された。

【講義メモ】
・まずはチャレンジしてみること。
・英語しか話せない環境に身を置くことも大切。
→都道府県の外国人交流会のようなイベントに参加。
・上達するためには、毎日続けること。
→英語の音楽を聴くこと。興味があるものから始める。
・構文や文法をおろそかにしては、表現が乏しくなり、誤解を招くおそれがある。
・結果を判断するために、目的と明確な目標を設定する。

〈講義Ⅲ〉「ファンダメンタル・良い審判員になるためには」

講師：Mr. Costas Rigas（FIBA）

1 日目、2 日目の合計 3 時間を超えるリガス氏の講義は、YOC の中でもとりわけ有意義な時間となった。「審判とは何か」という総論から、メカニックスの説明、ユーロリーグの審判研修ビデオクリップを見ながらレクチャーを受けた。時にはご自身の経験談とユーモアを交えながら、受講生にも分かりやすい英語で講義された。

「当たり前」のことと、それがどれだけ達成できているか、とのチェックの時間でもあり、新しいことを学び吸収する時間でもあった。

【講義メモ】

（1）総論

①6000 名を超える公認審判員の数は世界でもトップクラス。特に女性レフリーの数が多いことは、誇るべきことである。審判員の数を増加させるだけではなく、よいレフリーを世界の舞台へ送りこむことが今後の課題だ。

②審判の評価について、レフリーは体格・体型の問題ではない。体型によって、何かを失っているわけではない。いいパフォーマンス（良い判定）をすることが何よりも大切である。

③ルールの理解が大切―文章の裏に何があるのか正しく理解することが重要。

（2）レフリーの役割

①審判は、コートの上では孤独である。（この点リガス氏は「believe himself」－孤独な任務で、自分自身を信じられるか、と表現された。）両チームの「勝ちたい」という気持ちをコントロールする必要がある。世界ではしばしば勝ちたい気持ちが先行し、乱闘や収拾のつかないことになることがある。ゲームを支配するためには日本の審判員がコーチに対する礼儀正しい態度が、国際ゲームにおいては必ずしも望まれることではない。ゲームを支配しコントロールするために、時として自分自身の人格を変える必要がある。

②常に冷静でいることが必要である。勝つべきプレーヤーが勝ち、活躍するプレーヤーが活躍する。よりよいプレーヤーが勝つ環境を作り出すことが我々の役割だ。

③審判員はゲームに関与することは許されても、ゲームを妨害することは許されない。また、審判員は敗者の言い訳にされることがしばしばある。これは、審判員の「仕事、役割」であることも覚えておかなければならない。

④パートナーとのチームワークが大切である。

（3）まとめ～審判員に求められること～

①見た目（ふさわしい立振る舞いをすること）・勇気（見たものを吹くこと）・正直さ・一貫性・知識（ルールの理解、条文の意図）・知性・強さ・判定力・ゲームの精神を理解すること。

②正しいかどうかではなく、そのゲームにとって正しかったかどうか。

〈講義Ⅳ〉「ルールについて」
講師：平野彰夫氏（規則委員長）

各班に分かれて問題作成。翌日の時間に検討した。

〈講義Ⅴ〉「全日本ナショナリズムの諸活動に参加して」
講師：貝塚宗義氏（元全日本ナショナルチーム　マネージャー）

貝塚氏は、全日本ナショナルチームのマネージャーとして数多くの国内外のゲームに関与されてきた。ベンチからレフリーに求められることについて話された。

【講義メモ】

・日本が世界で勝てない理由―身長の差。
・ドリブルのつきだし（世界と日本の基準の差）については勉強してほしい。
・FIBA マガジンなどの情報を自分で収集し、世界の流れを感じることが大切。

〈講義Ⅵ〉「世界のトップレベルで求められているレフェリングとは」
講師：Mr. Costas Rigas（FIBA）

【講義メモ】

（１）ルールとメカニックの関係

①メカニックは絶対ではなく、ルールが第一である。たとえば、①エリアのレフリーが④エリアのファウルをコールすることがそれである。コーチ、プレーヤーは、正しいルールの適用を望んでいる。また、一貫性のある判定を望んでいる。

②スペースを見るために、いい角度をとれる位置を求めなければならない。なぜ走るのか、どこに向かって動くのか、なぜその位置取りをするのか、ということが大切である。メカニックはその手段に過ぎない。

③強い笛と正確なシグナルが要求されている。

（２）技術理解について

①特にトラベリングについて、全世界で問題視されている。見誤るとゲームを壊すことになる。トラベリングを吹かないことによって、ファウルが起こる可能性が高くなる。これは片方のチームに不利になる。

（３）審判の技術について

①ダブルホイッスルの後は何もアクションをしない。必ずアイ・コンタクトをする。

②主審と副審の権限に差はない。「We are team」の精神である。

③もし自分がエリアの外を超えて吹くときは 1000%の自信があること。

④5 秒バイオレーションを数えはじめる瞬間について。防御側のプレーヤーが近接し

てきた瞬間から数え始める。近接していない状態ではカウントしない。

第５　実技実習について

日時	8 月 14 日（土）11：45～　A コート
対戦カード	大井高校　－　熊谷工業高校
審判割当	鬼 塚　・　土 屋（東京）
講師	平原勇次氏・吉田憲生氏

・ゲームの入り方が良くなかった。試合への緊張。
・接触に反応してしまい、中身のない笛が多い。笛が軽いという指摘。
・確認をせず、形や流れで判断してしまうことが多い。
・トレイルの動きについて、3 エリアに入ることが多い。そこまで見に行く必要があるかどうかを判断する必要がある。
・体力不足。

日時	8 月 15 日（日）11：45～　A コート
対戦カード	早稲田大学付属本庄高校　－　熊谷工業高校
審判割当	鬼 塚　・　横 井（静岡）
講師	吉田利治氏・平原勇次氏

・アップを丁寧に行う。一度心拍数を上げる。試合前はできるだけ控室（冷房のある部屋）に入らず、体温管理に配慮。
・相手審判とのコミュニケーションが何より大切。初めての相手ならなおさら意識しなければならない。
・TO の管理。24 秒タイマーの管理が不十分。
・暑さで集中力を失うこともあり、通常の判断ができなくなることもあるが、何とかして克服する必要がある。
・速効時のファウル。遅れて吹いたケースであるが、「ファウル！」と笛よりも声でゲームを止めたことは評価された。

第６　結び

YOC の経験は、「確認と収穫」の連続であった。ルールに対する理解、技術に対する理解、レフリーの実技、これまでの経験がどこまで活きるか確認し、不足している部分に関しては補い伸ばしていくことの連続であった。

日常のレフリー活動で座学はほとんどなかったため、意識してそのような機会を設けることが大切だと感じた。それにより、毎日のレフリー活動をレビューすることで、より濃密なものになることは間違いない。

また、今回、全国から集まった多くの仲間に恵まれたことも非常に刺激的であった。しばしば仕事が忙しくなり、モチベーションが低下してしまうレフリー活動だが、YOC でできた仲間と近況報告しながら、高いモチベーションを維持していきたいと思う。

特に、年齢的に社会人 1 年目～3 年目の仲間が多く、学生とは違った悩みを共有できたことも大きな収穫であった。社会人受講生の多くが不慣れな仕事と新しい職場環境、人間関係に悩みながら、週末のレフリー活動に従事している。

最後に、YOC に推薦していただいたことに心から感謝したい。今後は、自分自身の成長だけではなく、仲間や次に審判員を目指すことを考えている人にその魅力を伝えることや、相談役になったり、思いを共有したりすることにも注力していきたい。